

児童生徒数の把握や、中学卒業後、高校へ行っていない者への進学ガイダンスの周知などを行っている」などの意見が出されました。

続いての第2部は「外国につながる子どもの進学問題を考える」と題して、特に進学問題をテーマとした内容になりました。まずは本プロジェクトが主催した「多言語による高校進学ガイダンス」の実施報告がありました。報告者からは参加者の内訳や実施内容の他、アンケート結果から今後開催する上での課題についての報告がなされました。

次に、子どもを高校に進学させた経験をもつ保護者による体験談発表がありました（フォーラム報告②）。最後に様々な形で外国人生徒に関わっている方を集めてのパネルディスカッションがありました。その中で、学校現場の先生からは「外国人の児童生徒教育支援を考える上で、子どもたちに関わる者は、彼らの学習を小学校・中学校・高校別に短期的に考えるのではなく、すべてが一人の人間の学びとして長いスパンで捉える必要がある」、「生徒が例えば工業高校に入学したとき、そこで学

ぶためにはより専門的な用語を知ることが必要になってくる。そういう意味では、日本語指導も日常会話・教科学習・専門的な学習などに整理して考える必要がある」などの意見が出されました。

4時間の長丁場でしたが、18名で報告やディスカッションをするという盛沢山の内容で、とても充実したフォーラムだったと思います。HANDSプロジェクトでは今後もこのフォーラムを毎年継続していきます。



## フォーラム報告②

# 私の体験談

梁 恵 林

(宇都宮市はばたき教室指導員)

私の息子は2008年4月に来日して、S中学校に編入しました。入学してから11ヶ月後に高校入学試験を受けてW高校に入りました。私は以前日本に留学した経験がありましたので、息子が日本に来る前に挨拶や簡単な文法程度の日本語を教えようと思いました。しかし、中国の中学校は宿題が多く、実際にはほとんど日本語の勉強はできませんでした。ですから日本に来た時、息子は簡単な文章が読める程度で、聞き取りはほとんどできず挨拶以外の言葉はあまり話せませんでした。

普通の外国人留学生は、少なくとも一年間どこかの日本語学校で習ってから日本の大学に入学します。しかし、小中高の児童生徒たちは入学した

らすぐに教科学習をしなければならず日本語の勉強をする時間がありません。

日本の日常生活についても全くわかりません。例えば中国には下駄箱に靴を脱いで上履きに履き替える習慣がありません。食堂はありますが、給食はありません。給食についてはこんなエピソードがあります。息子が中学校に初めて行った日、給食時間になりました。食べ物は配ってくれるのか自分で取りに行くのか、どのように並んでとるのか、おかわりできるものはどれかなど分からなくて困ったそうです。息子はまだ、日本語を上手に聞き取れませんでしたので、言葉で教えてもらってもわからなかったと思います。息子は不安になりながらも他の

生徒を観察していたそうです。その時、一人のクラスメートが模範を示すように一つひとつゆっくりやってみせてくれたそうです。息子はあの時は本当にうれしかったと言っていました。当時、母親としては息子が不安やストレスで心を病んでしまわぬように祈って止みませんでした。

息子にさびしい思いをさせないために、私も息子と一緒に勉強しました。息子と一緒に漢字検定や日本語能力試験を受けました。その当時ほぼ毎晩教育テレビで放送される「手話ニュース」を見ていました。中国語は日本語と同じ漢字も使いますが、読み方は違います。手話ニュースの字幕には漢字にフリガナがついていますので、漢字の読み方が勉強できますし、ヒアリングの勉強にもなりました。

中国の学校と日本の学校の違いはもう一つあります。日本の学校は毎週のように保護者へ連絡通知を出してくれますが、中国では年に2回の保護者懇談会以外は、特別なことがない限り保護者への通知はありません。保護者のほとんどが共働きで忙しく、子どもの教育は学校に任せています。このような習慣の国から日本に来て、さらに日本語がよくわからない状況ですと、どのように学校の先生とコミュニケーションをとればいいのかと困っている人は少なくないと思います。

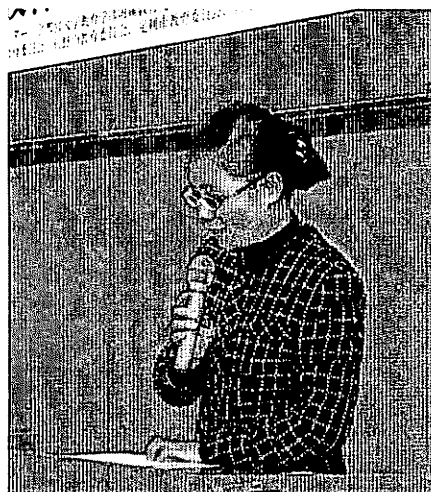
今、宇都宮市には「はばたき日本語教室」があります。そこでは日本語指導だけでなく、学校の規則や生活習慣も教えてくれます。もし息子が来日した時、このような教室があったらあまり困ることもなく編入できたと思います。

主人は日本人ですが、それでも息子の高校進学

では大変苦勞をしました。国際交流協会、教育委員会、学校の先生、友人などに相談したり、インターネットで調べたりして、少しずつ高校進学についての知識を得ていきました。ですから、宇都宮大学で実施された「多言語による高校進学ガイダンス」のようなイベントは、外国人保護者にとってとてもありがたいと思います。外国人の親として、主催された宇都宮大学 HANDS プロジェクトの方に感謝申し上げます。

最後に教育委員会の先生方や各学校の教室で外国人生徒と保護者を応援してくれる先生方に心から感謝いたします。また、国際交流協会などで熱心に日本語ボランティアをしてくれる方たちにもお礼申し上げます。皆さんがいればこそ日本で暮らす外国人生徒と保護者たちは困難の山を越えることができます。今日はありがとうございました。

(※子ども教育フォーラムでの発表内容を基に再構成しました)



## 高校へ進学する息子を持って

石和スワンニー

(栃木県国際交流協会タイ語相談員)

私はタイのバンコク出身です。すべての教育をタイで受けてきました。日本へは、日本語の勉強をするために来日しました。日本に来てから3年間日本語学校に通い、日本人と結婚しました。その後、

男の子を二人授かりました。子どもは日本人と同じように幼稚園から高校までの教育を受けさせてきました。

一番苦勞したのはやはり高校進学の時でした。